中国古代原始本草体系の推察

森村謙一

中国において、医薬その他の実用に供する自然物の知識体系の書、すなわち本草書は、同様に巨大な歴史的体系である医書とともに、中国医学史を具現する代表的存在であるが、そのような知識体系は優に二千年を超える歴史を持つと確実に推定できるにもかかわらず、中国文化の他分野の歴史遺産にくらべると残存度が意外に低い。その原因として次のようなことが考えられる。

（一）本草書は、それぞれの時代に雑然と恣意に編まれたのではなく、歴史的な意義を強く意識して造られた。したがって、それぞれの本草書は、編纂の目的目標・規模・構成などが明白であり、殊に規模の点では、時代の当該知識体系を代表する総合的大規模本草書と、目的や使途の点で限定された中・小規模本草書に分れ、前者は或る意味では時の王朝の文化的権威のシンボルでもあったから、激しい王朝の栄枯盛衰交代の波にのまれて忘秩する機会が多く、後者は実用的価値のみを意識されるが故に、継承される率は低かった。

（二）右の原因に関連して、総合的大規模本草書は、各時代においてその時より前に出たすべての本草知識を網羅する。言いかえればそれより前の本草書の内容はすべて洩れなく継承し、その上に新しい知見・解釈を添えるという編纂方式で造られるのが常であった。すなわち、総合的大規模本草書は、それぞれの時代における本草知識体系そのものの増補版であった。したがって、ひとたび新しく出ると、以前のものは少なくとも実用的価値は消えたと見なされ、亡秩してゆく可能性が大となる。

結局具体的には、書の構成が崩れずに残存している大規模なものは宋代の『証類本草』以降であり、そのような残存書に吸収されたが故に、かなりの程度に復元可能なものは、無理のない範囲で唐代の『新修本草』、かなりの仮定的要素を添付して敢えてまとまった姿に戻そうと試みても精々梁代の『神農本草経集注』あたりまでである。幾多の先学によって、そうした歴史上の本草書の遡及復元の努力

はなされてきて、学問上極めて有意義な成果は挙げられてきているが、報告者は、近年極めて豊富となった新出土医薬文物資料の検討をも重要な基礎として、古代原始本草体系の具体的な姿を推察しようと努めている。

（大阪府立茨木高等学校）

中国医学と道教

（Ⅲ　薬籤について）

吉　元　昭　治

さきの本学会において、演者は中国伝統医学と道教とが密接な関係があることを述べた。すなわちその概説と、最も古い道教々典といわれる「太平経」にみられる医学的事項を分類、整理し、道教医学といわれるべきものの存在を発表した。

今回は、最も新らしい、現在における道教医学の遺影として、特に台湾における、薬籤について述べることにする。現在台湾においては、道教は仏教等と習合して民間信仰の形をとっている。道教の医学的部門、すなわち道教医学もこれに伴い民間療法の姿に変っている。

この道教医学のうちで、籤（おみくじ）は薬籤に、符（おふだ）は安胎符とか催生符となり、巫覡的な面は童乩となっている。